方向

第八一号　一九八八年四月七日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

照珍律師（六）

赤谷明・海

三、照珍の人物について

凡そ人物論は、独断に陥ることが多い。よし自伝や日記の類が残されていたとしても、その人間の真相はなかなかに判るものではない。まして、照珍の場合の如き、残された文献史料の乏しいこととて、彼の人物を明かに描き出すことは到底私のよくするところではない。今はただ、彼の人物を知る上に参考となる材料を提出することを主とし、私の想像や憶測は出来るだけひかえておきたい。よきにつけ、あしきにつけ、それによって照珍のありのままの姿がゆがめられることを恐れるからである。ここに提出する材料によって、照珍の人物の輪郭だけでも浮び出れば幸いである。

照珍の性格や風格について、『伝』の作者は、

「其性高古。不事縁飾。尋常麻衲紙衣。翛然自守。想其清散之風。如北山松下見永道人。」

と讃えており、『本朝高僧伝』もこれをうけて、「鹿衣間色は沙門の通儀であるのに、後世或いは禅律、或は真言律だと云って、華美な衣服を着用に及んでいるが、さすが珍公は達人であり、宮中に上るにも麻衲楮衣にすぎなかった。」と衣体の面に於ける律僧としての見識をかっている。又『記』には

「珍師抗志高明。視世之名利如見破履。唯思削跡而長育仏身。及遇五位山勝地〈註〉。卓錫其中。味禪律以自飫弄松柏以自適。真比丘哉」

と、隠者的な風格をも添えている。右の如く元禄期の人々の心象に映った照珍の人間が、果して有りのままの照珍であるかどうか。もっと直接的な資料によって窺ってみよう。

〈註〉法金剛院の地を五位山という。

彼の物質的な生活を知る手がかりとして、分衣の目録が残っているので、繁に亘るが、その全部を左に記すこととする。

三衣鉢坐具針筒。長衣七条（上下）。香七条（一帖）。編衫（上下）。香編衫（一具）。白小袖（上下）。同裏（上下）。繻表（上下）。同裏（一）。木綿表（一）。同裏（上下）。抜出綿（上中下）四。帷子（上中下）四。絹帽子（上下）。頭巾（一）。帯（一筋）。襪子（一足）。木綿蹈皮（上下）。水精念珠（一連）。浅木念珠（一連）。末広扇子（上中下）四本。桧扇子（一本）。文箱（上下）二。硯箱（石有）一。硯水入（ビイドロ小壺）一。唐小盆一枚。梨地香箱一。香炉（一唐金、一焼物）二。染付茶碗一。茶碗台一。草鞋一足。沓一足。

〈法金剛院蔵『宝園照珍分衣道具目録』〉

即ち、六物を除いて合計三十一件五十点である。ここに示されたものはすべて軽物であり、寺に帰属する重物の全体が判らないので、これのみによって彼の生活程度を計る事は危険である。忍仙の『律宗行事目心鈔』（正、七四、一二八、a）に収める叡尊の軽物が、八十五件二百点に及んでいるのと比較するとき、大体の見当はつく

であろう。

照珍は死の二三年前から、屢々遺言状を認めたらしい。寛永四年に造られた彼の木像の胎内からもそれが出た由であるが、今所在がはっきりしない。法金剛院に現存するものは三通であり、一通は伝香寺での学問料三百文を返済しない正十郎の件について弟子達へ書き置いたもの、他の二通は、寛永四年と仝五年に書かれた法金剛院金剛寺、伝香寺三寺の後嗣、財務、教誡に関するもので、寛永四年のものには、

照珍儀死去候ハハ法金剛院血脈相続□□尊玉ニ譲可申候雖然昨今若輩候条明後年二月ニ寺相渡可申それまてハ我等時之ことく寄合候而寺持可申候内之者共も尊玉ニ奉公ふり可仕候過分ニ余米可在之候間能々修理可仕尊玉若輩にてむさと物を被遣候へハ如何候間小遣分ニ三石ツツあて可遣毎年尊玉良玉玉　空賢立合さんよう可仕候

とあり、更に金剛寺のところでも

玉琳寛印空賢長蔵立合さん用可仕過分ニ余米可在候間銀子仕修理料に急度仕可申事専用候私ニ不可仕候

と、財務について立合算用すべき点と、物を私に浪費することなく寺の修理につとむべきだという意味の事を述べている。

次には既にふれた如く還暦の年に作られた彼の遺誡なるものが伝っている。もと貞子院にあった彼の肖像画に自賛として書かれたもので、現在伝わる写しは左の如く『記』所載のものと字句に多少の相違がある。（法金剛院蔵、江戸初期写「照珍宗師御影賛」）。傍註〈〔　〕内〉は『記』所載のもの。

遺誡偈曰

吾門人住侶　願断色財非　忍辱衣身着〔身着忍辱衣〕　須離命〔名〕利難　勤行精進護　吉羅謹〔堅〕堅〔全〕持　戒律心文受〔字〕　興営寺舎行〔専〕

因打伽陀一章以為証云爾

尸羅止作全〔戒〕持〔全〕戒〔持〕　願生〔必〕天〔生〕楽〔都〕果〔天〕円〔楽〕明〔果〕　灌頂瓶成尊信入〔受〕　深移仏理妙伝心〔凡身即仏理安然〕

『記』の作者が見たものは、照珍が後に推敲を加えたものでもあろうか。然し内容の上での相違はない。色財の欲を断じ、名利に拘泥せず、忍辱を衣とし、精進不退、持戒堅固であれと誡め、普通ならば興隆仏法とでも云うべきところ、寺舎の興営に専念せよとある。遺言状にある寺の修理を想起すべきである。終りに附加された一偈は、生きては持戒清浄であり、死しては兜率の浄土に往生し、兼ねては秘密灌頂の深義に達し、即身成仏の理を体得せんとの心境を述べたものであろう。この一偈は多分に彼の思想的立場や信仰を表明しており、中でも兜率願生のこの一句は『伝』に臨終の状況を述べて、

臨終告門人曰。吾其去矣。即安座縛牀。令衆唱弥勒聖号。師亦随念。乃泊然而化。

とある記事の信憑性を裏付ける一端ともなろう。弥勒信仰は上古はとも角、貞慶、叡尊等、鎌倉期以来の律僧に屢々見られるところであり、照珍の師泉奘もその系列に属する〈註〉。而して貞慶、叡尊に於いて著しいように弥勒信仰は舎利信仰と密接につながっており、照珍の場合に於いても同様である。

〈註〉「律苑僧宝伝」所収泉奘伝及び聖澄筆「泉奘肖像賛文」参照

『伝香寺舎利縁起』（伝香寺蔵、慶長十九年照珍艸并書）には

不佞照珍継泉奘和尚遺譜（中略）平常護念舎利祈現当二世所願

と述べ、更に慶長十八年四月に法金剛院に於いて舎利の奇瑞を感得した旨を記しており、『伝香寺仏舎利伝記』（唐招提寺蔵、覚明筆「宗要集」所収）にも

勵信心昼夜不怠誦不空三蔵之舎利礼文祈現当二世所願

とし、終りに偈を附して

信心円則声伝谷　舎利転光知仏身　重罪諸非正消滅　自他俱頓顕清真

と讃嘆している。尚、『記』に彼が十九度の長きに亘って唱導を勤めたとある唐招提寺の念仏会は、貞慶始めるところの舎利中心の行事である事を考える時、この行事と彼の信仰とをきり離すことは出来ない。

以上彼の手になる文献を二三照会（ママ）したのであるが、更に文献以外の資料に言及しておこう。

既に挙げた如く、彼は度々密教の伝授を受けており、又四十二才にして尚、戒壇院に於いて律部の教授を受け悉曇の相承も老境に入ってからと推定される。学問に対するこうした態度の中にも彼の人間の一面を窺い得ようと思われる。この木像の底には自筆の銘記があり、生国を明かし、歴住した寺々を列記している。

又彼には肖像画の外、木彫像もあり、いずれも生前に造顕したもので、弟子達の需めによるよりも己れの考えによったものと思われる。この木像の底には自筆の銘記があり、生国を明かし、歴住した寺々を列記している。第一章で最も屢々引用した『住持記』も彼自らの筆になり、更にこれも生前に作られた位牌の台底にも同様の記が遺されている。この死後に対する用意周到さ、及び七大道場の歴住者たる事の度々に亘る表示の上にも「彼」

が浮き出ているといえよう。但しこの場合、「彼」に今日の時代感覚を以て接するのではなく、彼の生存した時代の風潮、彼が生を享けた家庭の環境、律僧としての生活習慣等を十分考慮に入れた上で彼を見なければならないことというまでもない。

律僧といえば、『住持記』の記載には間々誤りがあるのに、通別の夏臘については確かなものである。（比丘六念を忠実に行った結果であろうか）

彼が度々遺言状を書き、しかも鎖末（ママ）の事にまで心をくだいている点については、弟子達が年少であった事情を考慮に入れても、尚且彼の人物を示す一資料となるであろう。

尚、前記の肖像について、『記』の作者は

予嘗詣位山礼師之肖像。眉目顔貌気和如春。令人謁仰弗厭焉。

との感懐を述べているが、ここに現わされた風貌も一往の参考資料となるであろう。これについての私の印象は、春の如き温和さよりもむしろ戒山の評した如き高古の性につながり、野武士的な気骨と、時には厳格な気むずかしさをさえ感ずるものである。然しこうした主観を述べることは本稿の埒外に属することである。

斯の如く、照珍の人物にふれようとして関係資料を挙げたのであるが、果して真実の照珍の輪郭を示し得たかどうか。何はともあれ、戦国の乱世から漸く落ちつきを示してきた仏教界の中で、又明忍等による槙尾山系の戒律僧が世の視聴を集め出してきた動きの中で、伝統的な南北二京の律門に身を置き、その一棟梁、一名師として世上に名を知られた照珍であったことには間違いなく、そうした社会的な重さを次の詩に偲ぶことでこの稿を終

りたい。

宝園佳名尊洛城　一朝伝訃涙滂滂　律師行化及其物　臘月梅花発戒光　（大徳寺清巌和尚挽偈）

あとがき

私は律僧の生活の実態を知ることに最も強く惹かれるものである。その律僧が名士や学僧であろうとなかろうと問題ではない。ここに照珍律師を選んだのは比較的その資料が多かろうと一往の見当をつけたためでしかない。只その資料の中に、彼が学を求めるため、六十の歳を越えながら叡山に登った記録がある筈であった。私はそれを法金剛院で見た記憶がある。ところが調査に徹底を欠いて、それをすらここに提示する事が出来なかった。唐招提寺に於ける資料探しも少範囲にしか亘らず、泉涌寺は全く訪れていない。こうした基礎的な欠陥は、可能な限り自己の意見を抑制してやってみたいという私の試みを腰くだけの恰好にしてしまった。これは残念である。照珍の歴史的及び社会的背景については殆ど触れていないことが、彼の描写を一層ぼやけさす結果となっているが、本稿ではそこまで論及することを最初から意図していなかった。

「史料を駆使する」ということがややもすれば己の史観や主観の露呈でしかない事に対する反撥として、試みた方法ではあるが、結果的には「史料に駆使された」ぎこちない、不十分なものでしかないことをおそれるものである。

※赤谷明海氏の戒学に関する著作は、「南山大師の戒律観」「慧晃律師」「照珍律師」の外に、「めしいのひじり」「〔校異・拾遺・参考・覚書〕鑑真大和尚伝」などがある。「めしいのひじり」は鑑真和尚の伝記を盲人のためにやさしく書いたもので、かつて点字化され、ちかく活字化されようとしている。「〔校異・拾遺・参考・覚書〕鑑真大和尚伝」は『国書逸文研究』第一七号（一九八六年・国書逸文研究会刊）に掲載された。ほかに氏が唐招提寺や法金剛院で、什物や書籍を整理する際に書き抜き、毛筆で清書し、清楚な装いに製本した資料集がある。慧晃や照珍の著作の性質に照らせば、これもまた「赤谷明海の著作」と見てよいものであろう。

氏の未刊三論文を連載しえたことは、小誌『方向』の光栄である。許された紀美子夫人に改めて感謝したい。「資料集」は小誌のような貧弱な印刷機能では到底掲載できないので、遠慮せざるをえなかった。余談ながら、「資料集」の製本は、快気の名人として知られ、さきごろ逝去された松尾栄次郎氏の厚志によるものである。

本誌に掲載した三論文は、正確に印刷しえているとはいえない。今後『赤谷明海著作集』が編まれる際には、原稿に照らして厳密なものとせられるよう念願する。こんな言い訳を聞いたら、兜率浄土かどこかで草取りをしている孤山老、「あほんだらが…」と笑うことであろうが。

一九八八年三月二五日　原田憲雄

孤山雁信 ―赤谷明海書翰集― （二五）

原田憲雄編

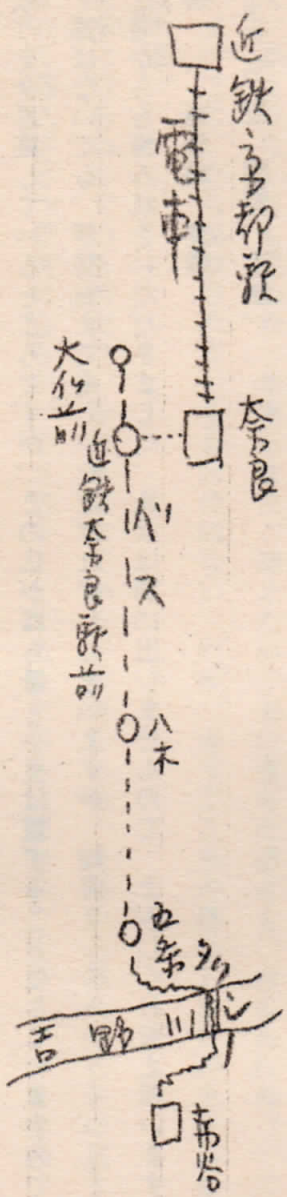
★1968.9.1. 原田憲雄宛。葉書。

去八月二十七日深夜、母が長逝しました。二十九日に野原の自宅で告別式を営み、最初坊墓地に埋葬しました。

法名は生前小生がつけておいた悲覚明栄大姉。享年八十一才です。赴報(ママ)を早速に送るべきところ、遠路ではあり一存で式後にいたしました点御詫び申しあげます。生前の御厚誼、心から御礼申します。九月一日。

★1968.9.8. 同宛。手紙。

拝復、御丁重な弔慰の御言葉を頂戴し恐縮です。態々野原まで焼香に出向くとの御意向、御辞退申しあげたいですが、お尋ねのままに道順を左に記します。



○近鉄京都駅より特急又は急行にて奈良へ。橿原行ならば西大寺駅で乗換え。

○近鉄奈良駅下車（目下地下鉄工事で様子が変わっていますが）登大路通（県庁前の広い道）を少し東（東大寺の方）へ行くとバスがあります。五条行の急行バスに乗って下さい。五条経由の新宮行特急でもよろしい。約一時間二十分で五条バス　センター着。

○降りたところにタクシーがなければセンターに申し出れば呼んでくれます。行先は野原町字中村です。お宮さん（御霊神社）のところの岐れ道を西から来て右手へとれば　すぐです。

○五条から野原へ通ずる大川橋が目下通行できません。東の栄山寺橋か　西の阪合部の橋かを通るでしょうが
栄山寺から来れば　宮さんのところで左の道を逆戻りすればよろしい。
中陰が三ケ月に亘るといけないとかいって、三十五日で仏事を切りあげることになっています。来る九月二十九日がその三十五日に相当しますが、小生は前日の二十八日（土）学校を終えて野原へ直行します。その晩法事をつとめ、翌朝高野山へ納骨に行く筈です。そちら様の御都合により二十八日に同道願っても結構です。
正月に修理を依頼していた法園寺伝来の破損仏、丁度母の死に合わせたように　この程出来上りました。開眼の日取りを今思案しているところですが、この仏が即ち母と小生は観ずることにしていますので、不便な野原まで足を運ばないでも、伊勢田まで来ていただければとも思いますが　如何？
亜土君からも悔み状をいただきました、礼状は別に出しませんので　よろしくお伝え願います。不一。九月八日
明海　　憲雄様　慶様

★1968.10.24. 同宛。手紙。

その後お変りないことと存じます。さて延引しておりました当家仏像の開眼法要を来る十一月三日（日）午前十時から行う事になりました。何かと御都合があろうかと思いますが　出来れば御光来いただきたく、お願い申しあげます。当日の参会者は導師の善法律寺様、仏師の白石様、他に近所の知人二人程、ほんの小人数ですのでお気楽にお越し下さい。奥様もお手すきでしたら御一緒に。右御案内申しあげます。十月二十四日　赤谷明海
原田憲雄様侍史

花　開　花　落

1965.3.11.－14

原田憲雄

♪

ここは私が育ち、生活してきた京都だ。それが私の育った土地とは思えなくなっている。京都がだんだん破壊され、すっかり違った土地になってゆく。だからといって、ここを立ち去り、行こうとめざすところもない。今日というひは、私にはなじみのない、ざらざらと埃っぽい日としか感ぜられない。といって過去にかえるすべもなく、かえりたいとも思わぬ。未来もまた、迎えたい、光に満ちた日とも、おもわれぬ。

いま、ここ、から追放されているわけではない。だが、坐りごこちの悪いムシロの上にいる感じが、たえず私にはある。

仕事に打ち込んでいる時だけ、それを忘れている。そのことを、仕事から離れたときに思う。この仕事が、私にとって他人にとって何になるか、そう思うことがある。答えは出ない。仕事も、する私も、はっきりした輪郭をもって意識される。しかし、それのある時と所があやふやで、私には把握できぬ。

石をなげる。つかんだ石、つかむ私、投げる私、投げた石、そこまでは確実に感ぜられる。そこから先になんの手ごたえもない。繰返しているうちに、夢を見ているのではないかと思われてくる。

歴史とは何か、世界とは何か。ヴェトナムでは罪もない人々が外国人や同国人に殺されている。だが、日本でも、罪もない人々が外国人や同国人に殺されている。毎日、新聞で見ていて、どうしようもない、そのような不幸が無くなるように、せめては少なくなるように、祈るほかは。祈りの声は低くなる。祈りは、実際的な力をも

たぬ。それが祈りの本質だ。そうと知りながら、私の声は高まらぬ。

おとといお太秦に用があり、西へ自転車を走らせていてふと思い付き、下の下立売の北野の社家を見に寄った。目指した家は姿を消し、安っぽい新しい家が建ちかけていた。秋の午後の疲れた陽ざしのような雰囲気がただよっていたものだ。いまは、そんなものはひとかけらもない。

懐古的になっているのか。そうではない、と私は思う。かぶりごこちがよくなるためには、帽子は古びなくてはならぬ。せっかくぴったりしてきた帽子を捨てるのは、惜しいではないか。あの家は、すこし傷みはしたがまだ当分かぶれる帽子のようだった。

いまのうちに、まだ残っている古いよいものを記録しておきたいと思う。が、無理であろう。私の足より、壊す人の手のほうが早い。

中国の旧詩を校訂し、注解し、翻訳することが、いまの日本でどれほどの価値があるかは分からぬ。だが、そのような作業をする人間が絶えないほうがよかろうとは思う。たずさわる人は多くない。今後もさして増えはすまい。とすれば非才もまた卑下してはおれぬ。力に応じた仕事はせねばなるまい。

♪

数日前からベネディット・クローチェの『美学』（長谷川天渓・大槻憲二訳）を読みはじめ、昨夜第一部を読み了えた。明瞭な部分からなる巨大な夢。どの部分もそれだけ取ってみると恐ろしくはっきりしていながら、全部を見渡すとありそうもない幻覚、アランのいう「精妙などこまで行っても果てしのない議論」のように感ぜら

れる。

十二時すこし前、第二部を読みさして床に入り、カロッサの『狂った世界』（若林光夫訳）を読み、三時すぎ読み了えた。ナチス独裁下の生活記録である。「見る人」の態度において富士正晴氏の小説集『帝国軍隊における学習序説』とどう違うか。『序説』の主人公は傍観者の目を維持しようと決意し、それを果たす。『狂った世界』の主人公は、冷静だが、傍観者ではない。しばしば彼の「弁護士的才能」を使用する。二人の資質、置かれた位置の相違にもよるだろう。カロッサはナチスが利用価値を認めた人物で、彼を傍観者の位置に立たせなかった。富士氏のほうはカロッサの位置をもたず、上官は彼の利用価値を認めなかった。二人の態度には大きな差異がある。が、共通したところもある。自らがやむなく取らねばならぬ条件を、己の創作へと転化させたことだ。敵の武器で戦ったのだ。

朝、はれた空、しろい雲、かがやく光の中でそよぐ梢を見た。アランの『精神と情熱とに関する八十一章』（小林秀雄訳）再読。

障子の外で、チク、チク、ピーチク、と鳥の鳴き声がする。そっと障子をあけたがすぐ逃げた。雀よりはすこし大きく尾の長い黒い鳥だ。蕗のとうが一つ二つ白っぽい緑をふくらませ、雲竜柳は芽ぶいている。障子をしめて机の前に坐ったが、こんどはガラス窓の外にかなりはげしい風の音が聞こえ、楠の梢が激しく揺すれている。

夕方までアランを読みつづけた。あかるく輝く道がつづくと思うと岩石の山に突当り、苦労してこえると、緑の草原がひらけ、清らかな川が流れている…といった調子だ。彼にしたがい歩きながら、ときどき自分の仕事の

ことを考えた。私は彼のように勤勉ではなかった。彼のように快活でないのは、たぶんそのためだ。夕食の後、李賀についての論文を読み返す。断片ばかりで、色あせてみえる。伝記を完成するためには、今までのものは序論にすぎない。うろうろ道草をくっている姿がみじめだ。己のあやふやさを見据えるためにもアランを読みとおさねばならぬ。

十一時すぎ床に入り、宋の陳允平の『西麓継周集』を読む。「蝶恋花　三」の

三月春光濃似酒　伝杯莫放纖纖手

の句が眼を射る。なんという春光であろう。窓の外ではしきりに風が吹き、夜の空気は冷たかったが、私は酒のように濃い春光に酔いはじめ、まぶたが重くなってゆくのだった。

♪

空は輝いているが、やはり風がつよい。春の嵐、そうだ春の嵐だ。ヘッセのあの小説が読みたくなった。さまよい出たがる気持ちをおさえ、アランにもどる。第二部第八章の原因からだ。このあたりから難路に入る。

重さは石のなかにあると言ふ。ところが石のなかには無い。

禅の公案のようだ。

重力は、地球のなかにも石のなかにもない両者の間にあつて、両者の共有である。

まるで「ソッタク同時」というやつみたいだ。ある種の禅は、そこから観念の安静を目指す。アランは、考えられた関係、形式にたどりつく。安静を目指すのはキツネで、人間ではあるまい。道元は不昧因果へ行った。不

昧因果は、安静には関わりなく、関係、形式を見出そうと勉める方向にあるのだろう。

Nが来て、三時間ほど話して、かえった。あまり元気がない。学校の雑務に手をとられ、仕事が進まないのだろう。それでも話すうちに元気がでてきて、「蘇小小」は李賀の女性理想化の一典型だろう、という。馮小憐についてわたしの進めている問題に触発されての言葉だが、うまく言い当てた感じだ。

そんなことを考えていると、アランへはなかなか戻れない。やっとかえっても、歩みはのろく、しばしば踏み外す。第四部第一章の判断で、こんな言葉にぶつかる。

精神は、独力で学んだ人達に見られる様なあの強い把握に到らず、かういふ証明の応接に疲労して参つて了ふ。だが独学の人は又屢々事物の難かしさや情熱の力に絡まれる。

Nはこの強い把握と、情熱の力を身にそなえているようだ。私には事物の難しさがあって、他の二つは微弱だ。つづいてこうある。

最も幸福なのは、適当に学ぶ余裕は充分あり乍ら、凡てを知り尽さうといふ無暗な野心に悩まされない人達で、彼等は、物事を素直に無理なく考へる。

わたしはSを幸福な人だと感じているが、なぜそう感ぜられるのかはっきりしなかった。アランのここに到って、これだ、と思った。人に対する判断は、しかし、長い目で見なければならぬ。簡単に断定し、簡単に翻すのは、軽薄だ。

♪

見ること、聞くこと、思うこと、そのすべてを書き留めることはできない。できても意味はあるまい。私は見ると同時に聞いている。現にこうして書いていても、走り去る航空機、自動車、電車の音が耳に入り、庭で鳴く鳥の声がきこえ、母の掃く音が聞こえてくる。そこに、のどかさと、あらあらしさと、無心さと、やさしさとを読むのは私だ。おなじ音を他の感情をもって聞く人があるだろう。そのひとりひとりを知ることはできない。掃く音にやさしさを感じたが、母にしてみれば神経痛の発作をこらえながらのつらい作業であったかもしれぬ。ふいに聯一首ができた。

花開花落維摩室
蓮上蓮下龍女堂

悲しきキリン

1988.3.2.　　原田　慶

カット　原田道子

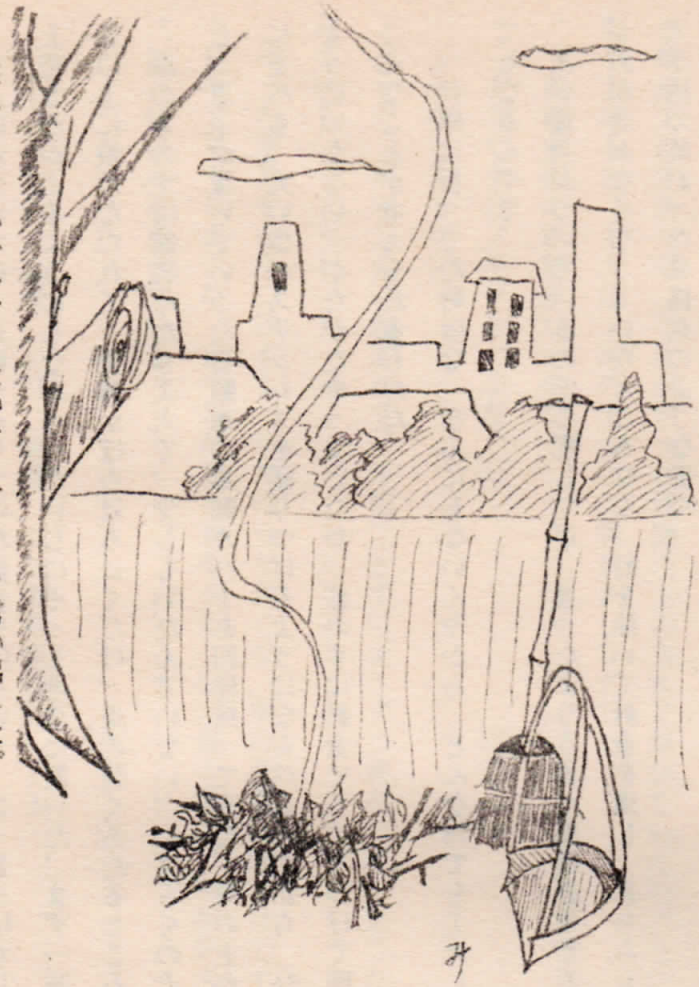
ちょっと手を貸して、と言うから何をするのかと思ったら、焼却炉を修理するのだという。

主人は、雑巾のような、つぎはぎだらけのジーンズの上下を着て、ちょっと手を貸すくらいでは済みそうにないかっこうをしている。何年も使ってきた焼却炉だし、火力の強い木の枝などを、どんどん燃やすから、内側は焼けてひどい様子になっているに違いない。もう新しいのと取り換えなければ駄目だろうと思っていたが、母のいた頃には、地面に少しくぼみをつくって、そのまま焚き火をしていたのだから、煙突があるだけでもよい方だ

と考えたりもしていた。

胴体が弱ってきて、煙突のついた屋根の部分の重みで、少し傾いて隙間ができている。これを二人で持ち上げて、まっすぐに立て直し、針金でくくりつけようということらしい。煙突のついた部分を、少しずつ引っ張ったりずらしたりして、やっと安定させた。煙突を支えている三本の鉄の棒を針金で胴体にくくりつけてみたが、ちょっと押すとぐさっとして、すぐ再び傾いてきそうである。

いっぺん、この上のところを取ってしまって、胴体の中から修繕しようか、などとたいそうなことを言い出した。



こんなに大い煙突のついたものを、倒さずに降ろすことができるだろうか、降ろせたとしても、もとどおりに上

へ乗せることができるだろうか。私は先ず失敗することばかり心配している。

主人はかまわずに、先程くくりつけた針金をほどいて、さっさとはずしにかかった。仕方なく手伝って、煙突を抱きかかえるようにしながら、だいじにそっと地面に置いた。まず一呼吸してから、中をのぞいてみると、想像以上に焼けただれて、金属がぼろぼろにくだけ、炎の強くあたるところほどそれはひどい。

底の方のすは鋳物だから丈夫で、少しもいたんでいない。しばらくのぞいていた主人は、黙って物置きへ行くと、息子が置いていった自動車の車軸カバーを四枚持って来た。炉の上から半身を中へのり出して、それを壁面に並べる。丸い型のステンレスを張りつけるようにならべるのだから、ひっくり返ったりすべったりして、思うようにいかない。がたがたやっていたが、底のすに針金でくくりつけて固定すると、内部の補強ができた。よくこんなことが考えられるものだ。

「兵隊に行ってた時はな、なんにもないんやから、どんな物でも工夫して使うんや、こんな金物やったら鍋にでもなるんやで。」

高い煙突がついているので心配したが、思ったよりうまく屋根を乗せることができた。あとは、胴が焼けてネジ釘が合わなくなっていたところにも、釘を除いて針金を通し、あちらもこちらもくくりつけて修理がすんだ。大手術の終わった負傷兵のような姿だ。

「これでまたしばらく使える。妙徳寺らしいてええがな、門がぼろぼろ、焼却炉がぼろぼろ、中にすんでる人もぼろぼろ。」

つぶやきながら、主人は満足気に自分の仕事を眺めている。私は声をたてて笑った。

振り返ると、炉の中心に煙突に向かって取りつけられていた心棒が、取り出されてころがっている。四本の細い鉄の棒を、同じ鉄の棒を輪にしたものにつけて、炉の中の風通しをよくし、煙を導くようにしてあったのだろう。これも焼けて、下の方がくにゃっと腰がくだけたように曲がっている。その四本棒の中にもう一本、長い鉄の棒が入れてあって、これがずっと煙突の上の方まで伸びていたのだろうか、同じように曲がっている。それを取り上げると、主人は、傍の土の山に突きさして立てた。

「前衛芸術の彫刻みたいやな。」

「そうですね。キリン、かな。」

「かなしきキリン」

そうだ、何年も火に包まれて、辛抱できずに少しずつ曲がってしまった鉄の棒だから、悲しさはいっぱいあふれている。

使った道具をかたづけると、正午にちかかった。朝の洗濯をすませてすぐに、ちょっと手を貸したはずだのに半日がすぎてしまった。まだ冬が立ち去ろうとしない庭の隅に、焼却炉大修理の記念として、かなしきキリンだけが、ぽつんと立っている。

天竜八部 —法華経巡礼 13—　　1988.4.3.　　原田憲雄

1-9. 帝釈天もまた従者の二万人の天子達と一緒にいた。それは、月天子(1) 日天子(2) 普光天子(3) 宝光天子(4) 遍照天子(5) で、これらの天子をはじめとする二万の天子達が一緒にいた。

śakreṇa ca devānāṃ indreṇa sārdhaṃ viṃśati-devaputra-sahasra-parivāreṇa;tadyathā,candreṇa 1 ca devaputreṇa sūryeṇa 2 ca devaputreṇa samantagandhena 3 ca devaputreṇa ratnaprabheṇa 4 ca devaputreṇāvabhāsaprabheṇa 5 ca devaputreṇa,evaṃ pramukhair viṃśatyā ca devaputra-sahasraiḥ:

sakro devanaṃ indrahは、もろもろの天の帝王であるシャクラ、すなわちインドラ神のことである。天とは、ここでは神のことで、後に出てくる天子とは、天すなわち神の息子という意味で、帝王ということではない。まぎらわしいが仏教経典でいう天子はいつも神の子の意味である。

インドラは、前一四世紀インド・イラン共同時代にすでにミトラ、ヴァルナ、ナーサティヤと共に名の見えている神で、金剛杵を投げて悪魔を殺し「ヴリトラ（障害・蛇）を殺す者」の名で呼ばれた軍神。『リグ・ヴェーダ』の讃歌の四分の一はインドラに捧げられている。仏教では、梵天とともに、守護神とされ、宇宙の中心のスメール（須弥山）頂上の三十三天の善見城に住むといわれる。仏教では、梵天とともに、守護神とされ、宇宙の中心のスメール（須弥山）頂上の三十三天の善見城に住むといわれる。因陀羅と音写し、釈提桓因、帝釈天、天帝釈、などと漢訳する。

月天子を妙本は名月天子とし、日天子にあたる語はないが、梵本にもそのような本があるから、クマーラジーヴァが勝手に省いたとはいえない。また普香天子の香(gandha)にあたる訳語が正本に見えないが、その前後の欠ける梵本もあるから、これまた法護が意改したともいえない。遍照天子にあたる語は妙本にない。

1-10. 四天王も従者の三万の天子とともにいた。それは増長天王、広目天王、持国天王、毘沙門天王であり、自在天子や大自在天子も三万の天子を従者として。

caturbhiś ca mahārājaih sārdhaṃ triṃśad-devaputra-sahasra-parivāraiḥ;tadyathā,virūḍhakena 1 ca mahārājena virūpākṣena 2 ca mahārājena dhṛtarāṣṭrena 3 ca mahārājena vaiśravaṇena 4 ca mahārājena,īśvareṇa 1 ca devaputreṇa maheśvareṇa 2 ca devaputreṇa triṃśad-devaputra-sahasra-parivārābhyāṃ:

インドでは叙事詩の成立した時代から世界の各方向を守護する神がいると考えられた。仏教に取り入れられ、持国天、増長天、広目天、多聞天が、帝釈天に仕えながらそれぞれ東南西北を守り四天王と呼ばれると説く。梵本の多くは四天王の名を掲げるが正・妙本にはない。増長天の梵名 virūḍhaka は、発芽しはじめた穀物の意。スメール山の南面中腹に住み kumbhāṇḍa などの鬼神を率いて南方を守護する。広目天の virūpākṣa は、醜い目をもつ、種々の仕事をもつ、の意。西方を守護し、悪人を罰し仏心を起こさせる。持国天の dhṛtarāṣṭra は、持続する王国をもつ意。ガンダルヴァの王で東方を守護する。多聞天の vaiśravaṇa は、よく聞かれたの意で毘沙門はその音写。クベーラともいい、夜叉の王で北方を守護する。自在天の īśvara は、能力のある意。大自在天の maheśvara とともにシヴァ神を指す。『リグ・ヴェーダ』では暴風神ルドラの尊称として使われ、破壊を司どるとされたが、破壊は再生につながるので生殖・生産・再生を司どるヒンドゥー教の主神の位置にのぼる。

1-11. またシャバ世界の主である梵天王も従者の梵天子一万二千と一緒にいた。それは、孔雀梵天子、光明梵

天子をはじめとする一万二千の梵天子達。

brahmaṇā ca sahāṃpatinā sārdhaṃ dvādaśa-brahmakāyika-devaputra-sahasra-paivārena; tadyathā, śikhinā 1 ca brahmaṇā jyotiṣprabheṇa 2 ca brahmaṇā,evaṃ pramukhairdvādaśabhiś ca brahmakāyika- devaputra-sahasraiḥ:

シャバ世界の sahā は、saha から出、saha には、共同の意と、耐える意とがあり、sahā もまた雑会世界、忍土などと訳される。生物・無生物が雑多に集合した世界の意であり、そこではそれぞれが忍耐しなければならないというほどの意であろう。梵天は、ヴィシュヌ、シヴァとともにヒンドゥー教の三大神とされるブラフマー。ブラフマーが世界を創造し、ヴィシュヌが維持し、シヴァが破壊するといわれる。ブラフマーは古くは非人格的な中性原理としてのブラフマンであり、ヴェーダ時代には神を讃える言葉や、ヴェーダに内在する神秘力を現わす語として用いられ、ウパニシャッド時代に宇宙の根本原理となり、人格化して男性神ブラフマーとなり、世界の主、神々の帝王として崇拝されたが、ヴィシュヌ、シヴァ神信仰が盛んになるにつれ、創造神としての役割が奪われ地位が低下したが、仏教では守護神とされた。

1-12. また八竜王も無量千万億の竜達と一緒にいた。それは、ナンダ竜王 (1)とウパナンダ竜王(2) とサーガラ(3) と九頭(4) と伐採(5) と慈心(6) と無熱(7) と青蓮華(8) などの竜王達。

aṣṭābhiś ca nāgarājaiḥ sārdhaṃ bahu-nāga-koṭī-śata-sahasra-parivāraiḥ:tadyathā,nandena 1 ca nāgarājenopanandena 2 ca nāgarājena sāgareṇa 3 ca vāsukinā 4 ca takṣakeṇa 5 ca manasvinā 6

cānavataptena 7 cotpalakena 8 ca nāgarājena:

龍は、インド原住民の間で崇拝された蛇神が仏教に取り入れられた。ナーガ族という民族が、現にインドにいる。ビクの名にナンダ、ウパナンダがあった。サーガラは海の意。後に有名なサーガラ竜王の娘の話が出てくるので固有名詞のようにしておいた。しかし航海に従事するナーガ族を指したのかもしれない。伐採というのも森林で伐採に従ったのであろう。ナーガ族については拙稿「ランカーの岸辺で」でも幾度か触れた。

1-13. また四キンナラ王も無量千万億の従者のキンナラ達と共にいた。それは、大樹キンナラ王(1) と大法キンナラ王(2) と妙法キンナラ王(3) と持法キンナラ王(4) 。

caturbhiś ca kiṃnararājaiḥ sārdhaṃ bahu-kiṃnara-koṭī-śata-sahasra-parivāraiḥ;tadyathā,drumeṇa 1 ca kiṃnararājena mahādharmeṇa 2 ca kiṃnararājena sudharmeṇa 3 ca kiṃnararājena dharmadhareṇa 4 ca kiṃnararājena:

キンナラは、声美しく歌舞に巧みな楽神。次に出るガンダルヴァとともにクベーラに仕えヒマラヤ山中に住むといわれる。大樹を妙本は大法とする。drumeṇa と dharmeṇa は紛れやすい。文脈からは妙本がよさそうだ。

1-14. また、ガンダルヴァ族の四天子も無量千万億の従者のガンダルヴァ達と共にいた。それは、楽ガンダルヴァ(1) と楽音ガンダルヴァ(2) と美ガンダルヴァ(3) と美音ガンダルヴァ(4) 。

caturbhiś ca gandharvakāyika-devaputraiḥ sārdhaṃ bahu-gandharva-śata-sahasra-parivāraiḥ;tadyathā,manojñena 1 ca gandharveṇa manojñasvareṇa 2 ca madhureṇa 3 ca madhrasvareṇa 4 ca gan-

dharveṇa:

ガンダルヴァは、インド神話では天界に住み、神々の飲物であるソーマ酒を守護する者とされ、仏教に入り、キンナラとともに天竜八部衆の一つとされた。音楽を司どり、幻術をなす者ともされ、ガンダルヴァの城といえば、幻や陽炎の化城を指し、経典中に譬喩としてよく使われる。

1-15. また、四アスラ王も無量千万億の従者のアスラ達と共にいた。それは、強力アスラ王(1) と大肩アスラ王(2) と綿織アスラ王(3) と障害アスラ王(4) 。

caturbhiś cāsurendraiḥ sārdhaṃ bahv-asura-koṭī-śata-sahasra-parivāraiḥ; tadyathā, balinā 1 cāsurendreṇa kharaskandhena 2 cāsurendreṇa vemacitriṇā 3 cāsurendreṇa rāhuṇā 4 cāsurendreṇa:

アスラは阿修羅と音訳され、悪神の代表とされたが仏教に入り守護神となった。これについても「ランカーの岸辺で」で詳しく述べた。強力としたのはアスラ中の最有力者バリで妙本では婆稚と音写する。

1-16. また、四ガルダ王も無量千万億の従者のガルダ達と共にいた。それは、大威徳ガルダ王(1) と大身ガルダ王(2) と大満ガルダ王(3) と如意ガルダ王(4) 。

caturbhiś ca garuḍendraiḥ sārdhaṃ bahu-garuḍa-koṭī-śatasahasra-parivāraiḥ; tadyathā, mahātejasā 1 ca garuḍendreṇa mahākāyena 2 ca mahāpūrṇena 3 ca maharddhiprāptena 4 ca garuḍendreṇa:

ガルダはインド神話では鳥類の王で、母が竜族の奴隷にされたことを怒り、復讐のため蛇類を常食とする。ヴィシュヌ神の乗物だった。仏教に入り八部衆の一つとなり、迦楼羅（かるら）と音写し金翅鳥と訳する。